

凶弾に倒れた

安倍元総理との

思い出と尽きない感謝

伊藤 澄夫

伊藤製作所社長
中京大学特別栄誉客員教授

2022年を振り返る季節になった。忘れ得ないのはあの事件、安倍晋三元総理が凶弾に倒れた衝撃だ。

私には安倍総理とのたくさんの思い出と感謝がある。

安倍総理が第二次政権を発足させた翌日の12月27日、安倍晋三個人名で英文で発表された「ダイヤモンド構想」がある。国際NPOであるProject SyndicateのHPに掲載された「Asia's Democratic Security Diamond」と題する論文中で示された、中国のこれ以上の横暴を止めるため、日本とハワイ（米国）、オーストラリア、インドの4カ所をひし形に結んで対抗しようというものだ。

その後、「新・報道2001」（フジテレビ系列）で私が社長を務める伊藤製作所への取材があり、海外進出先が中国ではなく、フィリピンやインドネシアということについて「親日国で、価値観を共有できる相手でない」との私のコメントに対し、「こうした伊藤社長の考え方は安倍外交と通じるものがある」と放送時のナレーション

く話し合った安倍総理が……。テレビに映る事件現場の様子が私を奈落の底に突き落としたのである。

安倍元総理の葬儀は7月12日、港区の増上寺で行われた。ここには一般向けの献花台が設けられたが、数ヶ所にわたる長い列ができ、学生を含む多くの国民が献花した。涙ながらに安倍さんを偲ぶ姿がテレビで放映されたが、これほど国民に尊敬され慕われた政治家の姿を目にしたのは、私の人生で初めてのことだ。

それにしても、安倍元総理の国葬に関して反対する世論が多かったのには驚いた。総理大臣として戦後最長の任期を果たし、前例のない功績を上げ、世界中に日本人政治家の優れたリーダーとして認められた事実は、日本人として誇れる事実だ。

このような政治家を上から目線で非難すれば自分たちの地位が上がるかのように考えている野党やマスコミの態度は日本人として恥ずかしい。突然暴漢に襲われ、急遽国葬の儀の手続きを行った前例はなく、多くの国民が納得できる

ンで確かに言ってくれた。私の海外戦略が安倍さんと同じ土俵で語られ、共通点が示されたのは、この上ない光栄だった。

それから約4年後、安倍総理と東南アジアを歴訪する機会を得た。17年1月13日、政府専用機でフィリピン大統領のドゥテルテ氏の故郷ダバオを訪問。空港から公邸まで現地の市民から国旗が破れんばかりの旗振りや歓声が数十分続いた。日比関係が良いことは分かっていたが、これほどの歓迎は、どの国のトップでも経験できないのではないかと思えるほどで、日本国民として鼻が高かった。

そんな、本当に過去にない偉大な日本のリーダーを無くしたことは残念でならない。

あの7月、そして国葬

私と安倍さんの交流はアジア歴訪後も続いた。

22年7月1日、三重県から出馬する参議院議員の選挙応援に、安倍さんが三重県孤野町に来られた。自民党代議士の石原氏は私と安倍さんの関係をよく知っていて、演

よう行動することは時間的にも不可能であり、そこには岸田総理の苦悩とご苦労があったことだろう。私は安倍元総理との思い出と感謝により、できることであれば国葬に参席したいと内心願った。しかし三重県からは数名だけが招待を受けると聞いていたので諦めていた。ところが9月になって岸田総理より招待状を頂いた。

そして9月27日、国技館での国葬に参列した。2階席から主な来賓と海外からの参列者を一望できた。岸田総理以下何名かが弔辞を述べ、その間、海外からの参列者はコピー用紙を読んでいるようだったが、多分、皆さんの弔辞が翻訳されていたのだろう。

最後に安倍政権で官房長官を務めた菅義偉前総理が弔辞を述べたが、安倍さんとの良好なお付き合いや菅さんの考えなどが胸に迫る素晴らしい弔辞であった。そして驚いたことに満場の拍手が起きた。多分翻訳文を読んでいた外国人が拍手をし、それにつられて全参列者が拍手をしたのだろう。私の長い人生で弔辞の拍手は初め

説会場の裏口で安倍総理を待つよう手配をしてくださった。もちろんS/Pには連絡済み。

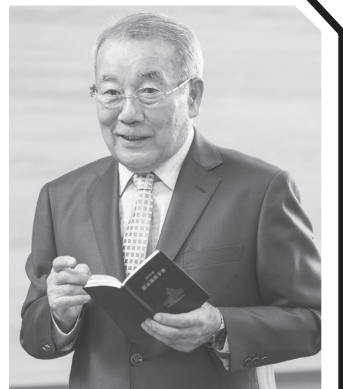
たった一人待つこと10分、安倍氏が到着された。地元の学生や子供の人気は熱気にあふれ、写真を撮ってほしいと頼む姿があった。20人近くが記念写真に収まり、中でも子供とその母親に安倍さんが寄り添われている姿が印象的だった。

その後、裏口にいられた安倍さんに「お久しぶりです」と声を掛けたら、いつもの笑顔で応えてくださった。その際、私が月刊誌に寄稿した安倍さんに関する記事とともに、奥様への化粧用品一式を買い物袋に入れてお渡しした。こんな場所では遠慮して受け取られないことも予想していたが、にっこりと笑顔で受け取って袋の中を覗き込まれ、本当に奥さんを愛しておられるのだなと思ったものだ。

その1週間後の7月8日、奈良市の近鉄大和西大寺駅北口で選挙応援しているさなか、暴漢に襲われ銃弾に倒られたのだ。丁度1週間前、四日市市での笑顔で楽し

てだった。それほど素晴らしいスピーチだったのだ。

安倍さんが「将来総理を交代したら、フィリピンでゴルフをしよう」という話をしていただけ聞いた。もしあの悲しい事件が無ければ、総理とマニラでゴルフができたと思うと残念至極と言うほかない。



いとう・すみお

1965年立命館大学経営学部を卒業後、伊藤製作所に入社。1986年同社代表取締役就任、現在に至る。順送り金型メーカーの老舗企業であり、国際競争力のある金型製造技術の確立に努め、無人化、高速化、精密化を追求したプレス加工で卓越した技術力を誇る。
(社)日本金型工業会・副会長・国際委員長を歴任。中京大学特別栄誉客員教授、国立ソウル科学技術大学校名譽教授、神戸大学非常勤講師などを務めて後進の育成に寄与。2017年4月「旭日単光章」、21年1月「紺綬褒章」受章。著書に『モノづくりこそニッポンの砦』『ニッポンのスゴい親父力経営』『日本製造業の後退は天下の一大事』がある。